様式３

提案趣旨説明書

〈作品タイトル〉

消えゆく影と紡がれる光　―スポーツを中心とした拠点づくり―

〈提案の趣旨〉

1.三河安城らしさ

「定刻通り通過するまち」として知られている三河安城駅は「この電車は三河安城駅を定刻通りに通過しました。」とアナウンスが流れる「影が薄い駅」となっている。そんな影の薄い三河安城には、人もいるし場所もあるが、それらを上手く活用できていないため、閑散としたまちになっている。しかし、そんな影の薄さが三河安城らしさと捉えた。

2.三河安城という町

三河安城の土地利用からは駅周辺には外部から人を引き留め、滞在できるような商業施設が少ない。また、駐車場などの都市の余白が存在し、その中にはかつて農業のために使われていた「明治用水」が暗渠となっていたりする。さらに、公園は禁止事項ばかりで、ボール遊び、などアクティブな活動が制限されている都市になっている。これらの活動の制限が影を形成していると考えた。

3.コンセプト

制限のない自由な使い方こそ都市を使いこなしていると言えるのではないだろうか。そこで本来であれば制限されていたことを可能にし、人が自由に使える都市空間を取り戻す必要がある。そのための方法として、三河安城らしさである「影が薄い」ことを利用することで活動の制限を解除しやすくなるだろう。そうすることで「影が薄いまち」から「存在感（光）のあるまち」に変えることができるのではないだろうか。

4.プロセス

2026 年のアリーナ竣工に合わせて、三河安城市内で「影が薄い」ならではの活動を創出する。2022 年から活動を開始し、竣工までの 4 年間で実験実証をしながら地域内での活性化を図る。そして、2026 年のアリーナ完成後は、地域内での賑わいだけでなく、スポーツ観戦で訪れる来訪者も滞在できるような活動を作り出す。これまで「影が薄い」特性を活かした「影の活動」だったが、利用者が地域に限定されず、外部からも利用されるようになりことで、場所として定着し、そこで様々な活動を行うことで、光の活動へと変化していく。そして、2040 年には、「影が薄い」から「存在感のある」まちに変化を成し遂げる。